# 中世ヨーロッパにおける巡礼の旅
## —時空間移動の視点から—

山　代　宏　道

【キーワード】巡礼、聖地、聖人、聖遺物、奇蹟

### はじめに

中世ヨーロッパでは人々はなぜ旅をしたのか。魂の救済を求める巡礼者としてか。冒険と夢を求める騎士としてか、あるいは新たな知識を求める学徒としてであろうか。中世においても現在と同じく旅の愉しみには好奇心と冒険心の満足があったはずである。多数の巡礼者の存在が示唆するのは、かつて中世の荘園制の下では多くの領民は土地に緊縛されており移動の自由がなかったと主張されてきていたが、そうした隷属状態を否定することはできないまでも、大幅な修正が必要ではないかということである。一般の巡礼者たちは、聖所において聖人に祈るとともに、かれらが生涯のあいだに見る最も贅沢な工芸品の展示を楽しむことができたであろう。[1)]

それにしても、11世紀以降に「絶えることなく歩きつづけたおびただしい数の巡礼の底流として、人々を旅の空へと駆り立ててやまない何か衝動めいたものが働いていたと思われる。…巡礼に出る以外に表現するすべのなかった、内心の、あるいは時代の衝迫である。」その衝動とはなにか。渡辺昌美氏は、つづけて注目すべき見解を展開している。まず、11世紀末頃から目につく隠遁者や苦行者の発生を指摘し、かれらが所有の否定と一所不住（放浪）を理想としていたことを重視する。イエスと弟子たちの生活に範を取る使徒的生活、言い換えれば清貧運動が、特別な宗教的資質に恵まれ、しかも強靱な意志を持つ少数者の特権であったとすると、巡礼は、この使徒的生活の理想実践の大衆版だったのではないか。一時的な日常の放棄、遁世だったのであり、名もない人々を危険な長途の旅に駆り立てたのは、巡礼の中に、日常的に与えられた救済を超えた真の救済が感じられたからではないか。[2)] 筆者も、巡礼についての渡辺氏の解釈を基本的に支持したい。

本稿では、中世ヨーロッパの巡礼の旅について検討していくが、巡礼を考える場合、まず、人々はなぜ、どこに巡礼の旅をしたのかが問題になる。巡礼者は聖地をめざし、聖地にある聖所で神や聖人に対して願いがかなうように祈った。では、中世ヨーロッパにおける聖地とはどのような場所であり、聖人崇拝はどのような特徴をもっていたのであろうか。

## 1 聖　地

### 1）時間的連続性

中世ヨーロッパの聖地はキリスト教の聖地と言って良いが、それでは、キリスト教以前には聖地はなかったのであろうか。この点で、われわれは中世という時代を超える時間の経過の中で、キリスト教布教以前と以後、そして現在という視点から巡礼そして聖地を問題にすることができる。結論的にいえば、キリスト教以前からの聖地にキリスト教の教会堂が建てられている事例が多くあるのであり、そこには聖地としての連続性が認められる。もっとも、キリスト教の新たな聖地が登場していったことを否定するものではない。

ブリテン島における巡礼の伝統は、ほぼ4000年前にまで遡る。ソールズベリー平原にあるストーンヘンジやエイヴベリーといった有名な神殿はウェセックス文明の中心であったが、そこにはコーンウォール、南海岸、ケント、イースト＝アングリア、ミドランド、北部、そしてウェールズ、すなわちブリテン島のあらゆる方面からの道が合流していた。これらの神殿がブリテン諸島における最初の巡礼地であったといえる。しかし、なぜ人々がそこを訪問し、どのような儀式がそこで行われたのかについては、いまだ十分に解明されているとは言えない。[3)]

巡礼についてより確実な記録が残されるようになるのは、キリスト教の布教時代になってからである。ケルト系の布教者たちがブリテンの人たちをキリスト教へと改宗させていったが、かれらに関わる巡礼の４聖地セント＝マイケルズ＝マウント、アイオナ、セント＝デイヴィッド司教座教会、リンディスファーンはすべて海岸線にあることが注目される。そのことは、ケルト系キリスト教の聖人たちが海を旅したということを示している。[4)]

ヨーロッパでは、キリスト教以前のケルト人の信仰の対象であった泉や井戸の場所にキリスト教の教会堂が建てられた場合が多くあった。ケルト人の宗教では、しばしば、神や女神は自然の恩恵の源泉である泉に住んでいると考えられていた。ノーサンブリア王オズワルド(604－642)とアイルランド修道士エイダンとは、協力して布教活動にあたっていたが、カーライル近郊イーデン渓谷のカークオズワルド村にある「オズワルドの泉」は、２人が土地の人々に「泉の精」への信仰を説き、その泉の上に教会堂を建てたことを物語っている。それは両宗教の融合が生み出したものである。[5)] ケルト人の神殿は井戸や流れのそばに位置していたが、今日まで、あるものは治療、あるものは呪いのための多くの神聖な井戸として存在しているのはこうした融合事情によるものである。

キリスト教布教者たちは、通常、異教的信仰を単に破壊するのではなく、むしろ古い神話や神聖な場所を利用しながら新しい宗教に適応させていった。ブリテン島へのキリスト教布教を先導したローマ教皇グレゴリー１世も、６世紀の布教者に対して古い崇拝場所にキリスト教の教会堂を建てるようにと指導している。[6)]

北ウェールズのホーリーウェル(Holywell)は、ケルト人信者たちによって決して放棄されることがなかった聖地である。中世において、この古代の異教の井戸は、最も人気のあるキリスト教巡礼地のひとつになった。それはまた、宗教改革の間にカトリック非国教徒による活動の拠点となり、巡礼者たちは聖地にやってくるのを止めなかった。アングリカンの司教と行政権力は巡礼を中止させようとしたが無理であった。今日でも、依然として、毎年、何千という巡礼者たちがこの聖地を訪れているのである。[7)]

そこで人々は何を求めているのであろうか。ケルト時代、キリスト教時代(カトリックであれアングリカンであれ)、そして、現代でも巡礼者が多いことは、そこが、宗派にかかわらず、民衆信仰における聖地であることを示している。そこは聖地としての連続性が認められる場所である。そこでは「癒し」が与えられ、奇蹟が体験される。そこは巡礼者が求めているものを与えてくれる場所である。すなわち、「救い」を与えてくれるとみなされているのである。

ところで、ヨーロッパの大陸側では、たとえば、ル=ピュイにおけるように古代の大地母神からマリア信仰への連続性が見られる。12世紀頃になると、それまで、アダムを誘惑したイヴのように、男性を誘惑する存在として断罪されることが多く、救済の対象として論じられることが少なかった女性に対して目が向けられるようになった。すなわち、人類の救世主キリストをもたらした聖母マリアという捉え方が登場してくる。母親と子供のキリスト、女性への関心の高まりが見られ、マリア信仰は、聖ベルナールのような雄弁な擁護者をもちながら、人々に親しみと救済への具体的手がかりを与えていったのである。[8)]

イングランドでも、イースト＝アングリアにあるウォルシンガムの聖母マリア修道院が、有名な巡礼地のひとつに発展していった。それは、1150年頃に女領主Richelde of Fervaques (Richelde de Faverches)によって建てられたチャペルに起源をもつようである。そのチャペルは、マリアへの受胎告知が起ったナザレの修道院と建物の外観が似ていたといわれる。彼女の息子ジェフリーは、聖地エルサレムを訪れていたが、かれは、1153年頃そのチャペルにアウグスティヌス派律修聖職者の修道院を付け加えている。その少し後から修道院は、巡礼の中心地となった。聖所としての発展の背景には、ヘンリー３世とエドワード１世が、しばしばウォルシンガムを訪れ寄進をなしたという事実がある。15世紀には、ノリッジ司教座教会付属修道院を除けば、それはノーフォーク地方で最も富裕な修道院となってきていた。[9)]

聖母のチャペルは、崇敬された「椅子に座るマリア」像をもっていたが、それに加えて、教会堂の東側には癒しの井戸(healing wells)が存在していたことが注目される。そのことがケルト的信仰の対象としての泉の存在を示唆しているからである。ウォルシンガムでの病気治癒奇蹟と巡礼との結びつきは、オクスフォードの聖所セント＝フライデスワイドと似ている。両聖所では治癒奇蹟が見られたが、その側には医術において優れた技能をもつアウグスティヌス派律修聖職者たちがいたのである。[10)] さらに、ウォルシンガムはその代表例であるが、12世紀を中心とするイ

ングランドとウェールズの141のアウグスティヌス派律修聖職者の修道院のうち、単独あるいは他の聖人とともに聖母マリアに捧げられているものが約半数67である。シトー派修道院と同様にアウグスティヌス派律修聖職者の修道院においても聖母マリア崇拝が盛んであったといえよう。[11]

このように聖地をめぐっては、まずは、中世ヨーロッパのキリスト教聖地への巡礼を問題にすることができるが、同時に、キリスト教以前の聖地、さらに現在でも巡礼者が集まる聖地との連続性に注目することが重要である。ここで、聖地をめぐる植島啓司氏の定義の一部を紹介しておきたい。聖地はわずか１センチたりとも場所を移動しない。聖地はきわめてシンプルな石組みをメルクマールとする。聖地は「もうひとつのネットワーク」を形成する。聖地は母胎回帰願望と結びつく。聖地とは夢見の場所である。聖地では感覚の再編成が行われる。[12] 時間を経ても変わらない聖地の特徴に関する重要な指摘であろう。

### ２）空間的連続性

中世の巡礼の旅をめぐっては、聖地と聖地をつなぐネットワークの形成が注目される。ケルト系キリスト教会は中世ヨーロッパにおける学問と芸術の最前線基地であったといえるが、それらの結びつきは国際的であった。初期の布教修道士たちは、西ブリテン（コーンウォール半島、ウェールズ、スコットランド西部）、アイルランド、ブルターニュの間を自由に移動していた。[13] そこでは、アイルランド海を中心とした周辺教会を結ぶ聖地（聖所）のネットワークが形成されていた。巡礼者たちは、いわば聖地を結ぶネットワーク上を移動していたと言えるのかもしれない。

ケルト系キリスト教の代表的聖人をあげれば、アイルランドのパトリック、スコットランドのコルンバ、ウェールズのデイヴィッド、ブルターニュのピランといったエネルギッシュな修道士たちがいた。かれらは同輩や弟子たちに尊敬されていたので、かれらの教会は聖所となり、巡礼者たちがあらゆる困難を乗り越えて旅してくるようになった。[14] スペインのサンチャゴ＝デ＝コンポステラ巡礼にしても、フランスからの４つのルート沿いに、出発地から教会堂や修道院をつなぎながら最終的聖地へと向かうネットワークを構成している。ローカルなレベルでも、聖所をつなぐネットワークが成立した。イングランドのウィンチェスターからカンタベリーへの巡礼路にある教会やチャペルのネットワーク。また、イースト＝アングリアのウォルシンガムへの巡礼路、さらに、北ウェールズのホーリーウェルへの巡礼路などでもそうであった。

聖地への巡礼路に沿って建てられていた十字架は、かつて道路沿いに普通に見られた印であった。十字架は道路標識として、旅行者たちにかれらが正しい道にいることを確認させたし、また、道端の聖所として、旅行者たちが安全な旅行のための祈りを捧げるのに役立った。さらに、礼拝堂（チャペル）も、通過する旅行者たちの祈りのために巡礼路に沿って建てられた。[15]

巡礼は通常は夏の時期に行われたので、巡礼者は、しばしば、生け垣の下や小屋の中で眠ったのであろう。イングランドに残存している専門の宿泊所としては、修道士や献身的慈善によって

運営されている施療院（ホスピス）にはじまり、旅行者に対してホスピタリティーを提供するよう戒律が義務づけている修道院、そして、通常の宿屋までいろいろであった。人気のある聖地では巡礼者たちを収容するための大きなホールが必要とされた。ウィンチェスターの聖スウィザン（St Swithun）の聖地における「見知らぬ人たちのホール」（Stranger's Hall）は、そうしたゲストハウスであり、ベネディクト派修道士たちによって境内で運営されていた。カンタベリーは多くのホスピスを持っていた。たとえば、「殉教者聖トマスのホスピタル」（Hospital of St Thomas the Martyr）は、今日ではキングズ＝ブリッジ＝ホスピタルとして知られるが、そのチャーター（設立文書）によれば、「輝かしい殉教者聖トマスによって貧しい旅人たちを受け入れるために」建設されたとある。このことは、12世紀に殉教者トマス＝ベケットのもとへの巡礼が生じる以前からカンタベリー巡礼が盛んであったことを示している。他の巡礼者たちは、大きなクライスト＝チャーチ付属修道院（司教座教会）に宿泊した。より少数の巡礼者たちは、北門側のセント＝ジョン＝ホスピタル、聖オーガスティン修道院、あるいは托鉢修道士たちによって運営されているゲストハウスなどに分宿したようである。[16)]

中世ヨーロッパの最大の聖地はエルサレムであったが、そこへと旅することができなかった巡礼者たちは、ローマへと旅行した。２番目に良い贖宥状（赦免状）を受け取るためにである。スペインの聖地サンチャゴ＝デ＝コンポステラ、そしてイングランドの聖地カンタベリーは、そこにある聖遺物の格付けからすると、等しくローマの次に位置づけられた。さらに、ウェールズのセント＝デイヴィッド教会への２回の巡礼は、ローマへの１回の巡礼と同等であるとみなされることもあったようである。[17)]

ローマへの巡礼は、聖ペテロのような普遍的聖人の普及を促進し、キリスト教世界の人々にとって身近なものにしていったと考えられる。他方、各地域にあった多くの地方的聖人崇拝センター（cult centers）は、聖遺物の分散、あるいは聖人との結合といった種々の事情から生れていた。各崇拝場所が、同一聖人の主要な聖所によってコントロールされていたわけではない。たとえば、ノーサンブリアの聖オズワルドは、初期には、かれの生涯、かれの死、そしてかれの分けられた身体の一部と結びついた多数の場所で崇拝されていたが、リンディスファーンに埋葬されてきていたかれの頭をダラム司教座教会が所有するようになったことが、ダラムに主要な地位を与えたのである。また、マーシアの隠修士である聖グスラック（714年死亡）の主たる聖所は、フェン地方のクローランド修道院におけるかれの埋葬場所であった。しかし、かれは、かつて修道士であったレプトン（Repton）でも記念されていた。1536年トーマス＝クロムウェルの調査官たちは、巡礼者たちがレプトンへと出かけ、頭痛を癒すためにかれらの頭に聖人の「鈴」を置いたと報告している。[18)]

## 2 聖人崇拝

巡礼者たちは、聖所において神や聖人に祈った。では、聖人たちに対して、何を手がかりにして祈ったのであろうか。それこそが、中世ヨーロッパの巡礼を考える際に重視すべき点である。巡礼者たちにとって、聖人たちの遺骸の一部やかれらに関連した物的遺物、すなわち聖遺物こそが、聖人たちに祈る際に欠かせない手がかりであった。[19)]

### 1）聖遺物

とりわけ十字軍遠征以後、ヨーロッパには東方から諸聖人に関する聖遺物が流入するようになった。その結果、ほとんどすべての主要な教会や修道院が聖遺物を保持するようになり、聖遺物の売買が行われる「マーケット」が存在するようになっていたようである。十字軍遠征が、西方への聖遺物の流入を通じて、普遍的聖人や東方の地方的聖人をキリスト教世界の西方において馴染みあるものにしていったことは無視できない。いずれにしても、有名な聖所が保管する聖遺物の数は、修道士や司教たちがより多くの巡礼者を引き付けようと競うようになるにつれて、ますます増加していった。そして、ほとんどの教会や修道院が、何らかの種類の聖遺物をもつようになったのである。

中世ヨーロッパでは、人々が町の評判を判断するのに、人口の規模や生産物の質にではなく、町にある聖遺物の数やその評判に基づいて判断したといわれる。いくつかの聖所は、多数の聖人たちとの結びつきをもっていた。たとえば、グラストンベリー修道院では、アーサー王以外にも、13人の聖人と結びついていた。また、他の聖所では、聖職者たちがどうして良いかわからないほどの聖遺物を所有していた。たとえば、カンタベリー大司教座教会では、400以上の聖遺物が箇条書にされていたようである。[20)]

こうした状況は、いわば聖遺物の氾濫であった。聖遺物が複製され、それはこっけいな程度にまで達した。聖母マリアに属するといわれる多数の帯(girdles)があったし、洗礼者ヨハネの少なくとも10の頭蓋骨があった。ある16世紀の巡礼者が、フランスの修道院で洗礼者ヨハネの頭を見せられた時、かれは、ほんの一日前にもうひとつの修道院で、同じ聖人の頭蓋骨を見てきたとコメントした。修道士は答えた。「おそらく、それは洗礼者ヨハネが青年であった時の頭蓋骨である。他方、われわれが保有しているこれは、年令と知恵において十分に成長した後のかれの頭蓋骨である」と。[21)] イングランドでは、聖ダンスタンの遺骨がグラストンベリーとカンタベリーの修道士たちとの間で長く激しい論争の対象となった。両方の修道士たちが真の聖遺物を保有していると主張したからである。グラストンベリーの修道士たちは、かれらが聖人の遺物をカンタベリー大司教座教会焼失後のくすぶる廃虚から救い出したと主張し、そのことを1508年まで成功裡に主張することができたようである。

ところで、聖人がある修道士の夢に現れ、相応しい保管場所を希望した結果、他の宗教施設から聖遺物の「盗み」が実行されることがあった。すなわち、聖遺物がますます崇拝されるようになると、それらが産み出す富が盗みを引き起こしていったのである。たとえば、1020年にひとりの巡礼者が尊者ベーダの聖遺物を盗み、ダラムへと持って行った。それは依然として、ダラム司教座教会のガリレー＝チャペル（Galilee Chapel）に安置されている。盗人に対して聖遺物を守るために、のちになると入念な予防策が取られるようになる。聖所は通常、複数の穴をもつようにデザインされた。それらの穴は巡礼者たちが、内部の聖遺物箱を見るのには十分な大きさであったが、それを取り出すには余りにも小さいものであった。さらに、修道士たちが、聖所上方の階廊から監視していた。巡礼者たちは、しばしば、小さなドアを通って聖域を離れねばならなかったし、そこで止められチェックされることもあった。[22]

### 2）奇 蹟

中世の奇蹟の証明は現在とはちがう。たとえば、夢あるいは幻視に現われた聖人が、自分が相応しく埋葬されていないので丁重に埋葬し直してくれと告げる。翌日、その場所に行って掘ると骨が出てくる。まさにそれこそ聖人の骨であった。丁重に埋葬しなおすと、奇蹟が起き始めた。中世の人々にはこうした論理だけで十分であったのである。[23] 聖人は、はるか過去の人であってもよかった。その意味では、時間を超越した存在であったとも言えるが、そうした聖人を想像し、その生を追体験するための手がかりが、現存する聖遺物であったわけである。

聖人崇敬によりもたらされた奇蹟の事例はしだいにパターン化していった。多くは、病気治癒に関するものであった。869年にデイン人によって殉教したイースト＝アングリア王エドムンド（841－69、在位c.865－69）の崇拝は、ひとつの形を示している。11世紀末の記録作者である大助祭ハーマン（Herman）は聖遺物に関する最初の控えめな報告をしているが、もしエドムンドが、かれの死直後に奇蹟をなしているのだとしたら、それらは記録されなかったのであると論評している。915年ころに聖人の遺骸がベリーへと移葬され、遺骸を保管するための共同体が設置されることで、聖人崇敬は発展していった。しかし、魔法を行う者（病気治癒者）としてのエドムンドの記録は11世紀を待たねばならない。カヌート王が即位し、1020年ベリーに修道院が設立されることで、単なるイースト＝アングリアの守護者としてではなく全国的なイングランド聖人としてエドムンド崇敬が発展していくのである。一連の国王たち（カヌート、エドワード証聖王、ハロルド）は、かれに敬意を払い支援した。そして、この時期から「大衆」巡礼と呼べるものが始まったようである。いろいろの場所から、多くの人々が自分たちの健康のためにその聖人を訪れるようになった。ある人々は、必要としていたものを直ちに受け取り、ある人々は定められた期間の後に受け取った。だれもが感謝しつつ立ち去ったといわれる。その後、奇蹟はそれほど頻繁ではなくなったが、これは力の欠如というよりも、なんらかの理由で巡礼者が減少したからであ

る。やってきた人々は、いつもどおり治癒された。聖人崇敬は、ノルマン征服とノルマン人修道院長ボールドウィンとともに新しい段階へと入る。すべてのイングランド人(アングロ＝デイン人)の守護者としてみずからを確立してきていた聖人は、ノルマン人たちをかれの支持母体につけ加えることになったのである。[24]

1102年ウェストミンスターで大司教アンセルムの下に開催された教会会議は、泉の崇拝を否認したが、さらなる禁止事項をつけ加えている。「何人も、司教の認可なく、大胆な刷新によって、泉、死体、あるいは他のものを神聖なものとして取り扱ってはならない。われわれは、そうした事態が生じていることを知っているのであるが。」D.ウェブは、認可されない死んだ個人の崇拝へ言及しているのは、ワルセオフ伯崇拝に対する攻撃であったと考えている。同伯は、反乱への共謀ゆえに1076年ウィリアム１世によって処刑された。フェン地方のクローランド修道院に埋葬されたかれは、1092年教会堂へ移葬された。ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーは、ワルセオフの遺体が腐敗していなかったばかりか、切断された首が身体に再び結合しており、そのことを示す細い赤線のみが認められたという奇蹟について語っている。この細部は、明らかにベリーの聖エドムンドの事例に似ている。ノルマン征服は、土着のイングランド人がかれらの伝統的な聖人たちに相応しい尊敬を与えるのに熱心であり、さらに、イングランド人やかれらの権利を守るために死んだ人々に名誉を与えがちであるような状況をつくり出した。宗教的徳をもっていたことがワルセオフのために主張されたりした。また、ウェッブが主張するように、イングランド人の目には、ワルセオフは侵略者たちに対する無実の人であり、その処刑が政治的「殉教」であったということにはほとんど疑問の余地がないかもしれない。[25]

しかし、ワルセオフ崇敬については、こうしたイングランド人側の立場のみが強調されるべきではない。なぜなら、そこにはノルマン人修道院長ジョフリー(Geffrey)による地方的なアングロ＝サクソン人聖人崇敬の創出と奇蹟による巡礼者の誘致という修道院全体としての動機を指摘することができるからである。[26]

## 3 巡 礼

### 1）巡礼者はだれか

これまでの検討から、中世ヨーロッパの巡礼の旅をめぐる舞台装置は整った。巡礼者たちがどのような聖地に出かけ、聖人や聖遺物を手がかりとして神に祈り、奇蹟を受けたかが明らかになった。それでは、主人公である巡礼者はどのような人々であったのであろうか。イングランドでの事情を中心に検討していきたい。

キリスト教布教時代には、富裕な人々のみがローマへの巡礼をすることができた。聖オーガスティンとかれの弟子たちは、イングランドへの布教活動をサクソン王族をキリスト教に改宗することで始めた。幾人かの国王たちは、非常に信心深くなり、自分自身の魂を救うことを王国を治

めることよりも優先するようになった。そうした人物のひとりが、ウェセックス王イナであった。かれは王座を親族に与え、自分はローマへの「永遠の巡礼」にでかけた。727年にはローマでイングランド人のためのホスピス（施療院）を建設している（それはヴァチカン近くに現存しているようである）。同時代の富裕なイングランド人たちが、かれの例に倣った。ローマで天国の鍵をもつ人（聖ペテロ）の近くで死ぬことで、かれらは最後の審判の日に天国に入る最上のチャンスを得ることができると信じていたのである。[27]

階層的には社会上層の人々が巡礼に出かけたことはまちがいない。国王、諸侯、司教やかれらの従者たちがエルサレム、ローマ、サンチャゴ＝デ＝コンポステラへ巡礼に出かけた。

1027年カヌート王はローマ巡礼を行い、ローマ教会への献金（ピーターズ＝ペンス）を約束している。12世紀の歴史家ヘンリー＝オヴ＝ハンティンドンは、「王が巡礼の際になす彼の施与、寛大な寄進、そして偉大で力強い行為に並ぶ者がいるであろうか。そのような華麗さと栄光のうちに、ローマのいくつかの聖所を訪問した王は、西方世界の領域内にはだれもいない」と述べている。また、歴史家ヘンリーは、1052－3年にアングロ＝サクソンの有力貴族ゴドウィン伯とかれの息子スヴェインが亡命先のフランドルからワイト島へ急行し、そこを略奪したと記しているが、実際には、息子はゴドウィンには同行せず、エルサレムへと向かっており、帰途には死んでしまったようである。[28]

1143年クリスマス前に、スティーヴン王の弟でグラストンベリー修道院長、さらにウィンチェスター司教であったヘンリー＝オヴ＝ブロアがローマへと旅し、それにカンタベリー大司教が続いた。両者とも、教皇インノセント２世が死んだいま、教皇使節に任命されることを求めていたからである。さらに、司教ヘンリーは、ローマ訪問（1149－51年）の帰途にウィンチェスターの司教館を飾るために、古代彫刻など多くの異教的な芸術品を購入して持ち帰ったと評判になった。かれはロマネスク芸術の最大のパトロンの１人であった。[29] こうした司教や大司教たちのローマ訪問を、ただちに巡礼とみなすことには疑問があるかもしれない。たしかに彼らのローマ行きは、宗教的敬虔さからというより、教皇へのアピールのための訪問であり、むしろ世俗的動機とみなされるべきかもしれない。しかし、一般の巡礼者たちについても、巡礼の宗教的動機と世俗的動機を区別することが困難な場合は多いのである。

リンカーン司教アレクサンダーはカンタベリー大司教ウィリアムとヨーク大司教サースタンに同行してローマを訪問し、寛大な寄進を行っているが、かれは、1145年再びローマへ行った。前回にも最大限の寛大さをもって行動していたので、新教皇エウゲニウス３世は名誉をもって歓待したと伝えられている。[30]

イングランドからサンチャゴ＝デ＝コンポステラ巡礼へと出かけた人々もいた。ヘンリー１世がレディング修道院へと贈った聖ヤコブの手は、その修道院をイングランドにおける聖ヤコブ信仰の主要センターとして確立した。その地位は、すでにコンポステラへ２度も巡礼していた男性

の息子をその聖遺物が治癒したことで強化されたという。[31)]

ヘンリー２世は、1166年南フランスのロカマドールで新しく出現した聖母マリアの聖地へと巡礼した最初期の人である。かれは、1170年に同所を再度訪問している。1177年初めには、コンポステラを訪れる意図を宣言し、フェルディナンド＝オヴ＝レオンに安全通行権を求めて使者を派遣したりしていたが、結局、何も起らなかった。[32)] この場合は、国王のサンチャゴ＝デ＝コンポステラ巡礼は実現しなかったが、その可能性は大きかったといえよう。

テュークスベリーの年代記作者は、グロースター伯リチャード＝オヴ＝クレアが同修道院を訪問したことだけでなく、1249年ポンティニィー(Pontigny)へ、そして翌年はサンチャゴ＝デ＝コンポステラへ巡礼したことを注意深く記している。修道士たちは、かれの旅行費用のため支援したようである。[33)]

中世後期の事例になるが、チョーサーの『カンタベリー物語』に登場するバースの女房は、カンタベリー巡礼に出かける以前から、すでに国際的な巡礼者であった。エルサレム、ローマ、サンチャゴ＝デ＝コンポステラを訪問していたし、ブーローニュの聖母マリアやケルン司教座教会の三博士を崇拝してきていた。15世紀初になると、さらなる国際的女性巡礼者が現れる。キングズ＝リンのMargery Kempeは、生涯にローマ、エルサレム、サンチャゴ＝デ＝コンポステラ、アシジ、ウィルスナク(Wilsnack)、アーヘンを訪問し、さらにモン＝サン＝ミッシェルへ巡礼したという。[34)]

中世イングランドで100人をくだらない証人が大陸の聖地巡礼を記憶していた。自分自身か、親族か、知人による巡礼である。コンポステラへは99の巡礼記録がある。ローマ巡礼には11人、エルサレム巡礼には16人の証人がいたようである。[35)]

社会的に下層の人々も国内の巡礼地を訪れた可能性がある。イングランドにおけるカンタベリーやウォルシンガムへの贖罪や病気治癒奇蹟を求めての巡礼がそうであった。普通のイングランド人たちは、自国の地方的聖所を訪問することで満足しなければならなかったが、そうした場合でも、どの聖所に行くかの選択は広範であったにちがいない。多くの教会堂が地方的聖人たちによって建設されたし、そこには、かれらの聖遺物が所蔵されていたからである。[36)]

さらに代理巡礼も行われた。もし、ある人が、みずから巡礼に出かけるにはあまりに病弱で、あまりに忙しく、また、「あまりに怠惰であった」ならば、かれは自分のために旅行してくれる代理人を雇うことができた。普通は、巡礼予定者が死亡した後、最後の審判の日にかれの魂にとって何らかの好意を得るために代理者によって巡礼が行われた。そのための資金が遺言によって措置されたようである。[37)]

では、巡礼はどのように行われたのであろうか。まず、巡礼者の出発にあたっては、かれの在所教区でミサと特別の祈りが捧げられた後、司祭は巡礼者の袋と長い杖に聖水を振りかけて聖別(祝福)した。ついで、巡礼者の友人と親戚は、かれらの前に十字架を掲げながら、巡礼者を村

から先導し、教区の境において彼に祝福を与えたようである。巡礼者は、司祭や世俗的領主からの手紙を携えていることもあった。かれが巡礼中に出会うであろう敬虔な人や慈善家に対して、かれの立場についての推薦状としての手紙である。[38)]

巡礼者は、巡礼服を身につけることを名誉であり悔い改めであるとみなしたにちがいない。それは、かれが巡礼者であることを示し、巡礼の途中で施与を求めるのに役立ったであろう。巡礼服は粗い羊毛でできた長い外衣であったが、色は茶色かあずき色で、その中で眠るのに十分に大きなものであった。十字架が袖を飾っていた。また、巡礼者の大きな丸い帽子は、幅広のつばをもっており、通常、前がまくれあがり、巡礼記念のバッジがついていた。バッジは、巡礼者がすでに訪れた聖所を示す象徴的な貝や鉛製のイメージ（像）であった。さらに、巡礼者がもつ杖の先端に中空の金属球が付いていることもあった。それは、じゃんじゃんと鳴る「カンタベリーの鈴」と呼ばれるようになる。[39)]

巡礼者のなかには、帰る家を持たない巡礼者もいた。いわばプロフェッショナルな巡礼者であり、まったく施与に依存して生活し、聖地から聖地へと終わりのない旅をしていた。こうした彼らの生活様式は各種の逃亡者や犯罪者、あるいは、定住生活に耐えられない人々のための便利な隠れみのとなった。犯罪者や放浪者たちのうちにいた娼婦たちは、たしかに、問題を引き起こす人々の一団であったが、彼女たちが巡礼者の装いをしていたために、寛大に許されていたようである。[40)]

### 2）巡礼の目的

通常、人々は、宗教的理由で巡礼に出かけたが、時々には、世俗的動機による者もいた。巡礼者は、聖所において祈ることで、事業（冒険）やビジネス、恋愛や戦争における成功、あるいは、病気や不能の治癒のために聖人に対して直接に訴えたのである。

ウィリアム＝クリスピン３世は捕虜になっていたが、ベック修道院の聖母マリアに祈願した。神が自分を苦難から自由にしてくれた時にはエルサレムを訪れるであろうと。まもなく獄から解放されたので、十字架を取った。それは、エルサレム行きの印であった。かれは巡礼の途中か出発前に死ぬことがあれば、ベックに埋葬してもらえるように神に願った。結局、かれは出発前に死に、約束どおりに埋葬されたが、それはマリアの取りなしのおかげであると言われた。[41)]

『コンクのサント＝フォワの奇蹟録』（1050年頃作成）は、ある捕われの巡礼者が、死の真際から生還できることを条件に巡礼を約束したが、それを果たすことができず、その代替行為として教会堂を建設したことを伝えている。[42)]

しかし、巡礼の動機としては、なによりも病気治癒の願いが多かったようである。その際、特定の聖地が特定の病気治癒の奇蹟を起こしている場合には、聖遺物の主体である聖人の属性と関連があったのであろう。たとえば、727年死亡したオックスフォードの若い女性殉教者である聖

フライデスワイドは若い女性の精神的疾患を癒すことで評判であったようにである。もっともサンチャゴ＝デ＝コンポステラ巡礼は、幅広い病気の治癒に効果があることが報告されており、それは、まるで「総合病院」のイメージを与えている。[43] 現在、ヨーロッパを旅すると聖母マリアやたとえばパレルモの女性聖人と、中世末に流行ったペストからの救済との結びつきを見ることができる。そのことは、14世紀が最盛期とされる巡礼現象と黒死病との関連を示唆しているのかもしれない。

ヘンリー２世の騎士たちによって殉教させられたカンタベリー大司教トマス＝ベケットが、その存在を感じさせたのはカンタベリーにおいてのみではなかった。他の聖人崇敬に対する直接的影響を引き起こしていく。以後、イングランドのいかなる聖人（聖遺物管理者）も、このカンタベリーの殉教者を無視することができなくなった。それは、単に、寄進を求めての粗暴な競争という問題だけではなく、新たな挑戦に直面した他の古い聖人たちの名誉維持の問題でもあった。とりわけ、ベケットの奇蹟が最も多く存在し、かれの聖人崇拝の広がりが最も爆発的であった初期にはそうであった。こうして、12世紀の最後の数十年間には、他の聖所の管理者たちがこの新しい殉教者の圧倒的な存在と折り合いをつけ、自分たちの聖人のアピールを強化し復活させるのに必要なステップを取ったことを示す証拠がある。ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーが聖フライデスワイドに言及するとき、最近の奇蹟については何ら述べていない。むしろ、彼女を奉じるオックスフォードの共同体メンバーにも、ベッケトの能力による受益者たちがいた。律修聖職者ロバートは下痢でひどく苦しんでいたが、殉教者の聖水によって癒されたし、修道院長Robert of Cricklade は、この奇蹟を目撃して、自分自身の病気（虚弱）のためにカンタベリーへと巡礼したのであった。[44]

1180年２月12日、国王の承認とともに、カンタベリー大司教リチャードや他の人々の面前で、聖フライデスワイドの聖遺物が新しい聖所へと移葬された。そして、奇蹟集が修道院長フィリップによって更新された。ベケット崇敬の影響は、この奇蹟集でも認めることができる。それは、奇蹟のトポス（型にはまった表現）と言えるものであり、他の聖人（おそらくより偉大でより祝福された聖人）が、行うことができないか行いたがらない、あるいは特別に任された奇蹟をある聖人が行ったというものである。フライデスワイドの奇蹟にも、こうした単純で一般的な奇蹟物語の事例が見られる。多数の巡礼者は、おそらく彼女のところに来るまえに、他の不特定の聖人達の聖所を訪ねてきていた。また、彼女は、セント＝エドムンドやセント＝オーバンの地域（イングランド中部）からやって来た女性たちのために治癒を行っている。ベッケットは、奇蹟集では特別に４回述べられている。ブルターニュ出身の騎士Hamoは、カンタベリーでは病気治癒がかなわず失望することになった。その後、治癒のためにではなく親族訪問のためにオックスフォードへやって来たが、治癒されるという喜ばしい驚きを得ることになった。他の受益者たちは、聖トマスにより、部分的に治癒されただけか、まったく治癒を得られなかった地域の人々であった。

しかしながら、トマスは、いつも最高の尊敬語で言及されている。なぜトマスが、かれらに恩恵を施すことができないか、あるいは望まなかったのかは説明されてはいない。しかし、考えられるのは、その地方の人々がかれらの守護聖人としてのフライデスワイドを信頼していたにちがいないということである。[45)]

ローマやエルサレムへの巡礼には特別の理由があった。コンポステラへの巡礼理由も国内巡礼のそれと大きく違っていたわけではないが、遠い聖地への巡礼は骨の折れる重大な行為であった。それだけ贖宥を得るという目的が大きな比重をしめていたのであろう。このように巡礼には悔い改めの行為として行われたものもあった。教会の司祭が、犯した罪に対する適切な悔悛行為として、懺悔席で悔い改めている人に特定の巡礼を課すこともあったようである。[46)]

また、中世ヨーロッパにおける旅の危険性ゆえに、巡礼が刑罰の一種である追放刑として、とりわけ異端者に対して課せられることがあった。しかし、そのことが、かえって巡礼路にそって異端が伝播するのを助長したかもしれないとする渡辺氏の指摘に注目すべきである。[47)]

巡礼者を受け入れた側の教会や修道院にとって、巡礼の経済効果は無視できないものであった。巡礼者の増加は施与や金品の奉納を増やし、それは経済的増収をもたらした。王や貴族たちは、聖所やホスピス（施療院）へ多額の金を基本財産として寄付した。また、一般巡礼者たちの寄付も、多くの教会堂や修道院を再建する助けとなった。[48)] 中世ヨーロッパにおいて、教会や修道院がいろいろの聖遺物を収集保管することで、できるだけ多くの巡礼者たちを引き付けようとしたのもこうした事情があったからである。

イングランドにおける巡礼人気の衰退は、16世紀以前にすでに始まっていた。ヘンリー８世が1534年にアングリカン＝チャーチを創設する以前から、奇蹟を起こす神秘的な聖遺物は懐疑的に見られるようになってきていた。真正の聖遺物でさえ信者たちを引き付ける力を失ってきていたのである。こうして、何世紀にもわたって崇拝されてきた聖所は、それらの宝物を剥ぎ取られ、他方、多数の巡礼者たちの接触によって摩滅していた壁は、崩壊するにまかされていったのである。[49)] もっとも、キリスト教以前からそうであった、いくつかの聖地が存続していったこともすでに見てきたとおりである。

## おわりに

11・12世紀ヨーロッパにおいて心の風景が変化した。[50)] たとえば、聖母マリアと子供のキリストが注目されるようになる。画一的で抽象的な神学理論が整備されて普及していくにしたがって、一般信者にとって身近に感じられるマリア信仰が求められていったのではないか。具体的な聖人崇敬は、キリスト教が在来の宗教を部分的に受け入れながら変化していった過程として捉えることができるのかもしれない。それは、きわめて具体的な信仰形態であった。聖人の身体的遺物は具体的であり、巡礼者（信者）たちは聖遺物に触れることで安心感を得たり、触れながら祈

ることで確実な効果を期待したのであろう。

この時期になると、神のイメージの変化が認められる。[51] 原罪ゆえに罪を犯す人間に対して処罰を行う神から、聖人あるいは聖母マリアの取りなしによって人間を救済してくれる神への変化である。キリストは人間の罪すべてを背負って犠牲になることで、人間を救済してくれる。しかし、ときには、神(聖人)の行う奇蹟を信じようとしないごう慢な人間が罰せられる奇蹟が行われることもあった。

12世紀に理想とされた使徒的生活は福音の伝道による人間の救済を意図していた。いわば、12世紀は、上からの司牧責任と下からの救済願望が歩み寄って具体的な宗教形態が実践された時代であったといえる。聖職者の側からは使徒的生活(空間移動)が行われ、信者の側からは巡礼(空間移動)が行われた。それらは、ともにキリストの生き方の模倣であった。聖地巡礼とは、キリストの受難の跡をたどる行為であったからである。

現代でも巡礼が盛んである。めまぐるしくて生きることの意味を確認できないまま時間が過ぎ去っていき、人々は生物学的な体内時計と切り離された生活を送っている。巡礼とは、祈りながら、ただひたすら聖地をめざして歩く行為である。また、自然の中で自分自身をゆっくり振り返りながら、そして、神と対話しながら歩く。旅にともなう危険や苦しみもあるが、自然に抱かれて歩くことで体験できる喜びもある。聖地がもつ安らぎを与える力。自然のもつ治癒力。巡礼は危険と隣り合わせであったが、死ぬほどの苦労をして目標を達成した後の満足感や充実感を得ることができたのではないか。

巡礼という人の移動は、キリスト教的普遍性を広める働きをもった。さらに、巡礼を宗教的修業として捉えることができるかもしれない。施与に依存(清貧活動)することで、人間は1人では生きられないことを理解する。そして、人の優しさを知る。現代では、多くの場合に短時間で目的地へ到達することが期待されているが、中世ヨーロッパの巡礼の旅では、目的地へ到達するまでの途中の宗教的体験が重視されていたのである。また、言い換えれば、中世の巡礼とは、現世の日常性から出発して聖地に赴き、現世的で目に見える具体的な聖遺物を手がかりにして、時空を超えた聖人や神に祈ることで奇蹟を招来し、それによって現世的な病気治癒を得たり、来世での救済を約束されることで現世での精神的安心感を得るための時空間移動の行為であったといえるのではないか。

## 註

1）K.Sugden, *Walking the Pilgrim Ways.* Newton Abbot, Devon, 1991. p.10

2）渡辺昌美『巡礼の道－西ヨーロッパの歴史的景観－』中公新書、1980。pp.180, 211, 212.

3）Sugden, p.6.

4）Ibid.

5）鶴岡真弓「ケルト、サクソン、ローマ、ビザンティンを結ぶ－ノーサンブリアに誕生した『リンディスファーン福音書』の芸術－」『學燈』99-6（2002）p.10.

6）Sugden, p.7.

7）Sugden, p.15.

8）この点については、シトー派修道会と聖母マリア信仰との結びつきが注目される。12世紀の開墾地につくられた新村落にはマリアに捧げられている教会堂が多い。渡辺『巡礼の道』pp.204, 205.

9）D.Knowles et al.ed., *The Heads of Religious Houses, England and Wales, 940-1216.* Cambridge, 1972. pp.177-8; J.Adair, *The Pilgrim's Way: Shrines and Saints in Britain and Ireland.* London, 1978. p.114; N.Pevsner, *The Buildings of England: North-East Norfolk and Norwich.* Harmondsworth, Middlesex, 1970 (1962). pp.185-9.

10）E.J.Kealey, *Medieval Medicus: A Social History of Anglo-Norman Medicine.* Baltimore, 1981. pp.20-22; H.Mayr-Harting, "Functions of a Twelfth-Century Shrine: The Miracles of St. Frideswide," in Do. & R.I.Moore ed., *Studies in Medeival History.* 1985. pp.193-206.

11）D.Knowles et al.ed., *The Heads of Religious Houses.* pp.150-191.

12）植島氏が指摘する聖地の特徴のうち、他のものは以下のごとくである。聖地は「この世に存在しない場所」である。聖地は光りの記憶をたどる場所である。聖地には世界軸axis mundiが貫通しており、一種のメモリーバンク（記憶装置）として機能する。植島啓司『聖地の想像力－なぜ人は聖地をめざすのか－』集英社新書、2000。pp.5-6.

13）Sugden, p.7.

14）Sugden, p.7. ケルト系修道士に見られる異郷遍歴活動や布教活動とベネディクト派修道士の定住義務とは修道活動に関する対立概念として注目すべきであろう。遍歴布教活動と使徒的生活とのあいだには類似性が指摘できるのかもしれない。朝倉氏は、異郷遍歴を「単なる冒険でも巡礼のために故郷を捨てることでもなく、自らの霊魂の救済のためにつねに新しい故郷を求めて彷徨して歩く贖罪的苦行の意味を伴った禁欲的動機にもとづく行為」と定義している。朝倉文市『修道院－禁欲と観想の中世－』講談社現代新書、1995。pp.79-80.

15）Sugden, pp.10-11. 大きな巡礼十字架が、重要な聖地に向かう道路沿いに建てられた。それら

は通常の十字架よりも記念碑的であったので、いくつかは残存してきている。たとえば、ノーフォークの村のグリーン（広場）において２つの十字架が見られる。１つは、東からウォルシンガムに向かう道路上のBinhamにおいて、もうひとつは、南からウォルシンガムに向かう道路上のHockwold cum Wiltonにおいて立っている。イングランドにおいて最も良く保存されている巡礼チャペルがノーフォークのキングズ＝リンにおけるRed Mount Chapelである。それは、人工的な小円丘におけるレンガ造りの愛らしい八角形の塔である。

16）Sugden, p.11.

17）Sugden, p.12.

18）D.Webb, *Pilgrimage in Medieval England.* London, 2000. p.80.

19）聖人崇敬の全盛期を過ぎた時期においても、聖母マリアや大天使ミカエル信仰が流行し存続した理由として、両者には肉体的遺物が存在しなかったことを示唆する渡辺氏の見解が注目される。渡辺『巡礼の道』p.207.

20）Sugden, p.8.

21）Sugden, pp.12-14.

22）Sugden, p.14; J.Crook, *The Architectural Setting of the Cult of Saints in the Early Christian West c.300-c.1200.* Oxford, 2000.

23）渡辺『巡礼の道』pp.193,194.　渡辺昌美『中世の奇蹟と幻想』岩波新書、1989。

24）D.H.Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints.* Oxford, 1990（1978）. pp.131-2; Webb, pp.24-25.

25）Webb, pp.32-33.

26）山代宏道「1075年反乱と歴史家たち」『広島大学文学部紀要』55（1995）pp.79-98.

27）Sugden, p.7; D.J.Birch, *Pilgrimage to Rome in the Middle Ages.* Woodbridge, 1998.

28）D.Greenway trans., *Henry of Huntingdon, The History of the English People 1000-1154.* Oxford, 2000（1996）. pp.17, 21, 125.

29）Greeway, HH,HEP, p.82; G.Zarnecki, "Henry of Blois as a Patron of Sculpture" in S. Macready & F.H.Thompson ed., *Art and Patronage in the English Romanesque.* London, 1986. p.160; A.Petzold, *Romanesque Art.* London, 1995. p.49; F.Barlow, *The English Church 1066-1154.* London, 1979. p.87; Petzold, p.39.

30）Greeway, HH,HEP, pp.58, 84.

31）Webb, p.81.

32）Webb, p.115.

33）Webb, p.111.

34）Webb, pp.xi-xii, xiii.

35）Webb, p.186.

36）Sugden, pp.7-8.

37）Sugden, p.10.

38）Sugden, p.9.

39）Sugden, pp.8-9.

40）Sugden, pp.9, 10.

41）E.van Houts trans., *The Normans in Europe.* Manchester, 2000. p.89. 家や教会において、あるいは戦闘の最中になされた誓いが、しばしば信仰者に対して、安全な救出（出産）に対する感謝の巡礼のように、聖所への長い旅行を義務づけることがあった。Sugden, p.10.

42）van Houts, pp.215-7.

43）H.Mayr-Harting, "Functions of a Twelfth-Century Shrine；渡辺『巡礼の道』p.7.

44）Webb, p.52.

45）Webb, p.53.

46）Webb, p.187. 巡礼者には贖宥状が与えられた。遠い聖地へと赴いた巡礼者たちは、最上の贖宥状を受け取った。それぞれの聖地で、「５年と５四旬節（40日間）」続く完全な贖宥を受け、巡礼者たちは、かれらの人生の残りの間、罪を犯しても許されるほど多くの贖宥状を持ってイングランドへと帰ることもあった。Sugden, p.11.

47）Sugden, p.10; 渡辺『巡礼の道』p.174.

48）Sugden, p.10; 12世紀のグラストンベリー修道院は聖遺物の発見により経済的困窮から脱出することができた。青山吉信『グラストンベリー修道院－歴史と伝説－』山川出版社（1992）参照。

49）Sugden, p.15.

50）渡辺『巡礼の道』p.181.

51）渡辺『巡礼の道』p.209.

# Pilgrimage in Medieval Europe

## — Travel in Time and Space —

Hiromichi YAMASHIRO

Why did people travel in Medieval Europe? They traveled as pilgrims for salvation. They traveled as knights for adventure and dream. They traveled as scholars for new knowledge. They traveled to satisfy their curiosity and adventurous spirit. This paper discussed the case of pilgrimage. People could not stop moving out of their home for pilgrimage. They were moved by some kind of impulse. The paper clarified the historical background for this boom of pilgrimage in Medieval Europe.

The paper pointed out that there existed some kind of continuity of sacred sites before and after the introduction of Christianity. Sacred sites were where people felt cured and where they could experience miracles. After the Crusades to the East, many sacred relics were brought back to the West and most churches and abbeys kept them. Patron saints, through their relics, performed miracles and they attracted many pilgrims who were charmed by such miracles.

The paper also asked who pilgrims were and what their motives were. From England, people of higher social status traveled to Jerusalem, Rome and Santiago de Compostela. People of lower status also visited such great sacred sites on the Continent but in most cases visited the local shrines like the ones at Canterbury, Walsingham and Oxford, etc.

The author concluded that the twelfth century was the period when religious people regarded "the apostolic life" as ideal and themselves engaged in it and ordinary people went out for pilgrimage. But both of them, in different religious forms, tried to follow the life of Christ and his disciples while pursuing their salvation.